

J.M.R. レンツ受容史覚え書 後世詩人による再生の観点から (2)

その他のタイトル	Anmerkungen zur Rezeptionsgeschichte J.M.R.Lenz' in Hinsicht auf seine Wiederbelebung durch spatere Dichter (2)
著者	八亀 徳也
雑誌名	關西大學文學論集
巻	58
号	3
ページ	125-137
発行年	2009-01-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/1155

J. M. R. レンツ受容史覚え書 ——後世詩人による再生の観点から—— (2)

八 亀 徳 也

Ⅱ. レンツの死からビューヒナーの登場以前まで

1

前述したようにレンツは、1792年6月4日の早朝、モスクワのある路上でなくなっているところを発見された。M. N. ロザノフによれば、彼は、長い間居候させてもらっていた、ひとりの高潔なロシア人貴族の費用で埋葬されたという¹⁾。ところが一方、すでに1780年、ドイツで彼の死亡記事が出回る。その最初が、この年の8月1日、ベルリンの『文学演劇新聞』に匿名で載ったものである。いわく、「最近、『家庭教師』、『新メノーツァ』、『イギリス人』、『軍人たち』等の作者であるヨーハン・ラインホルト・ミヒャエル・レンツ（ママ）が亡くなった [...]」²⁾次に、同じく1780年9月7日、やはり匿名で、ハンブルクの『書籍商新聞』に、「すでに本年3月に、『家庭教師』、『新メノーツァ』等の作者で、1750(ママ)年リーフラントのゼスヴェーゲン生まれの、ヨーハン・ラインホルト・ミヒャエル・レンツ（ママ）氏が亡くなられた」³⁾なる記事が掲載され、さらに同年（月日不明）、ベルリンの『一般ドイツ文庫』で、「数年前大いに世間を賑わせたヨーハン・ラインホルト・ミヒャエル・レンツ(ママ)が最近死去した」と報ぜられる⁴⁾。

死亡時期の記述に差こそあれ、三つの記事が揃って、レンツの名前（ヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツ）を全く同様に書き間違っているのには、何らかの共通のニュースソースがあったことが想像できる。また死地につ

いての情報が無いのも頼りない話である。当時のヨーロッパではすでに広い通信網ができており、我々現代人から見れば意外に速く出来事が伝わったが、それでもバルト世界やスラブ世界はドイツ人にとってまだ遠い土地であった。それよりもむしろ、このような誤報が生じた原因として、1780年のレンツ自身の行動が挙げられよう。と言うのは、彼はこの年の1月末、ロシアの新首都であるサンクト・ペテルブルクへ発ち、9か月間もそこに滞在するからである。しかも彼は、1780年いったんリーフラントに帰郷するが、篤志家の許に身を寄せるものの、まもなく別れの挨拶もなしに出奔し、結局1780年から81年にかけての冬はどこで過ごしたか分からない状態になる。

しかるに、1808年に出版された物故者作家事典、『1750年から1800年の間に死去したドイツ人作家事典』では、約1ページの作品案内(省略)に先立って、やや正確にレンツの横顔を紹介している。

レンツ (ヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト)、
前掲者 [=レンツの父、クリスティアーン・ダーフィット・レンツ] の息子。

1769年以降ケーニッヒスベルク大学に学び、その後ベルリンに赴き、ある若い貴族をシュトラースブルクまで案内し、それから幾つかのライン地域に滞在、1778年頃精神病を得、伺候の職なくここかしこに、そして最後はモスクワに住む；1750年1月12日 [=ロシア歴]、リーフラントのゼスヴェーゲン生まれ；1792年5月24日 [同] 死亡⁵⁾。([] 内=筆者)

ところが他方、時代が下って1828年、始めて3巻からなる本格的なレンツ作品集を編集発行したL. ティーク (1773-1853) が、139ページにも亘る序文の中で、レンツの没年に関して根本的な過ちを犯している。

病から回復して、彼はしばらく後にサンクト・ペテルブルクへ、ここからモスクワへ辿り着き、そこで、私を知る限り、1780年後まもなく亡くなっ

た⁶⁾。

標記で示した「レンツの死からビューヒナーの登場以前まで」の時期、レンツを主人公にした受容作品は、前の時代と同様に、やはり依然として現れていない。本稿では、この期間における、シラーおよびゲーテとレンツとの関わりについて検討する。

2

そもそもレンツよりわずか8歳年下で、同じシュトゥルム・ウント・ドラング期の作家であったシラー（1759-1805）が、1774年頃から知名度が高まりつつあったこの先輩作家の存在を知らないはずはなく、彼の創作精神・作風に関心を持っていたであろうことも十分想像できる。

二人の共通項はまず1781年に成立する。

1775年、シュヴァーベンの革命的詩人、Chr. Fr. D. シューバルト（1739-91）が『シュヴァーベン雑誌』に「人間の心の物語について」と題する、古代から扱われてきた「兄弟争い」と「放蕩息子」をテーマとする短編を発表し、その冒頭で、「ここに、ちょうど我々の間で起こったひとつの小さな出来事があるが、私は、これから芝居か長編小説を書いてくれるようにと、これをひとりの天才に委ねる。ただ、臆病さから舞台をスペインやギリシャに作ることはせず、ドイツの大地の上に乗ってくればよいのだが」⁷⁾と訴える。このメッセージにレンツは1775/76年に未完の戯曲『有徳のろくでなし』で応え、他方シラーは5年後の1781年、処女作の『群盗』を発表する。

興味深いことに、シューバルトの小品とレンツおよびシラーの作品とでは、相争う兄弟の間で役割が正反対になっている。すなわちシューバルトでは、ある貴族に二人の息子がいて、謹厳実直で敬虔深そうな兄のヴィルヘルムが父の財産を狙い、刺客を使って襲わさせるが、一方の弟カールは心根はよいが血の気の多い腕白で、学業を怠けるうちに悪徳の道にはまり、拳銃の果てに決闘事件を起こして父親に勘当されてしまう。しかしその後、改悛の情から父に詫び

状を書き—これは兄に没収されてしまうが—最後は暴漢に襲われた父を救う、という構成になっている。これに対しレンツにおいては、城主の長男ダーフィットが、お人好しではあるが出来の悪さ故に父に疎んぜられ、城を飛び出して軍隊に入るものの、やがて反省の手紙を父に出す。他方、頭のよい弟のユストは城にいて、兄の長子権を奪うために、兄から父に宛てた手紙は悉く押さえ、父への情報を遮断する⁸⁾。またシラーの、完成された悲劇『群盜』の粗筋は次の通りである。伯爵モール家の次男フランツは、兄カールの家督相続権を奪うために父を騙して兄を廃嫡させ、兄の偽りの戦死報告で父を悲しませて後悔させ、最後には塔に幽閉する。一方、遊学の身で放蕩無頼の生活を送っているカールは、にせの勘当の手紙で自暴自棄になり、仲間と一緒に盜賊団を結成し、町を襲撃して人を殺め、犯罪を重ねる。その後、改悛の情と望郷の念に駆られて帰郷し、父を助け出すが父はショックで昇天、昔の恋人を犠牲にして始めて仲間から解放され、自らを法の裁きに委ねるために従容として立ち去る。

ところでレンツには、シュトゥルム・ウント・ドラング時代の唯一の演劇論とも言うべき『演劇覚え書』(1774)があるが、シラーが劇作の際にこの理論書をどれだけ意識し、あるいは引用したかの確証はない。例えば、『覚え書』は全編、アリストテレス批判、アリストテレスの『詩学』から拡大発展した、いわゆる「三一一致の法則」に盲従するフランス古典主義作家への拒絶反応、これらとは逆のシェイクスピア賛美などの精神で貫かれている。シラーの『群盜』序文(1781)にも部分的にこのような主張が認められる⁹⁾。しかし、アリストテレスとフランス古典劇を批判し、シェイクスピアを賛美する態度は、1780年代を中心とする疾風怒濤時代の若い作家たちにはほぼ共通する特徴であり、とくにレンツとシラーを結びつける根拠にはなり得ない。もっとも、レンツは当時の著作の中で、ドラマを書く作家、その行為、そして作品をそれぞれ„Maler“, „malen“, „Gemälde“なる言葉で頻繁に表現していたが¹⁰⁾、シラーも上記の序文および1782年の『群盜』初演の告知文に同様の用語を使用していることは我々の関心を惹く¹¹⁾。またレンツは、息子が父親の財産を奪うために父を地下室に閉じ込め、父が死んだと言いつつ触らしたという、フランスのラングドックで起き

た事件にもとづいて¹²⁾、短い戯曲『二人の老人』（1776）を書いているが、前述したように、シラーも『群盗』の中で、フランツに父親を塔に幽閉させている¹³⁾。

3

1796年、レンツの死後すでに4年目、レンツとシラーとの新たな接点が生まれる。この年の4月25日、シラーは自分の住むイエーナから、見本市のためにライプツィヒに来ていたテュービンゲンの出版業者コッタ宛てに、ドイツおよびヨーロッパの地図やゲーテの作品以外に、レンツの劇作品もライプツィヒで買って、彼が来訪する予定をしているイエーナまで持って来てくれるよう手紙を書く。

もしこの手紙が、あなたがまだライプツィヒにおられる間に届くのであれば、同封の紙片に示しました書目を私の代わりに購入して、当地イエーナへ持って来て頂けないでしょうか。レンツの『家庭教師』と『軍人たち』は、ひょっとしたら稀覯本になっているかも知れませんが、ヴァイガントが出版主で、そこでまだ数部が手に入るだろうと思います。ひょっとして古書店で見つかるかも知れません [...] ¹⁴⁾

シラーはヴァイマルへ観劇旅行をする直前に急いで書いたこの手紙を送り忘れたため、コッタは書簡をライプツィヒで受け取れず、テュービンゲンに転送されたものを帰郷後に読み、5月20日付のシラーへの手紙で、「[...] ライプツィヒへ送られた、4月26日（ママ）付のあなたのお手紙は、すでにこちらに着いていました。その中で当方に出されましたご注文は直ちに手配させましたので、ご請求のものはまもなくお送りできると思います[...]」¹⁵⁾と答えている。レンツの作品に関する二人のやりとりはこれ以上残されていないが、シラーは無事に二作品を入手できたであろうと推定される。

翌年1797年の1月17日、シラーはゲーテに出した手紙の末尾に、序で書きの

ように、「もし、レンツの遺稿のうちで何らかのものがあなたの手に入れば、私のことを思い出して下さい。我々は、見つかるものは何でも『ホーレン』のために掻き集めねばならないのです」¹⁶⁾と記す。ゲーテはこの求めに応じ、2月1日、「いくつかのレンツ文献も同封してあります。そのうちの何かが利用できるかどうか、そしてどのように利用できるかは、あなたが判断なさるでしょう。いずれにせよ、この風変わりな稿本は、我々がもう一度それについて議論するまで、手元に置いておいて下さい」¹⁷⁾(下線部=筆者)の一文を含んだ返事とともに、レンツの書簡体小説『森の隠者、「ヴェルターの悩み」姉妹編』(1776)、韻文劇『タンタロス、寸劇、オリンポス山にて』(1776)、詩「田舎の恋」(1772年以降)の原稿をシラーに送る。

翌日2月2日、シラーは謝礼の手紙の冒頭に以下のような感想を書く。

[...] レンツ文献には、これまで目を通した限り、まったく途方もないしろものが入っていますが、あのヴェルター時代の感じ方が今の時代に再現することは、きっと面白味がなくはないでしょう。とくに著者の死と不幸な生涯がすべての蟠りを消し去りましたし、これらの断片作品は常に伝記的で病理学的な価値を持っているに違いないからです。[...]¹⁸⁾(下線部=筆者)

こうしてシラーは、ゲーテの協力のおかげで自ら編集する二つの刊行物に掲載するレンツの原稿が入手でき、一つ目の『森の隠者』は『ホーレン』誌の1797年第4、5号に、二つの詩作品『タンタロス』と「田舎の恋」は、1798年版の『文芸年鑑』に掲載された¹⁹⁾。

ところで、上記『森の隠者』は、„ein Pendant zu Werthers Leiden“, すなわち、『若きヴェルテルの悩み』の対の作品』を副題とする、若きゲーテのベストセラーを強く意識した、あるいはそれを当てこすった作品である。その上、主要登場人物のHerzとRotheはそれぞれLenzとGoetheを連想させるのみならず、Herzは社会の中で人間関係において挫折し傷ついて森に隠遁し、片

や Rothe の方は、ヴァイマルの宮廷で活躍するゲーテよろしく、上流階級で人の覚えめでたく、順風満帆の生活を送る、そしてそういう Rothe を Herz は批判する。三つ目の作品「田舎の恋」は、かつてゲーテに捨てられた、ゼーゼンハイムの牧師ブリーオンの娘、フリーデリーケのところへ、見習い牧師としてレンツがやって来て彼女に恋心を抱くが、彼女は以前の恋人への思慕を依然として強く持っている、というような状況を彷彿とさせる内容である。あろうことか、レンツは前者とともにこれをゲーテにプレゼントする。

上の引用部分で、レンツの遺稿のことをゲーテは「この風変わりな稿本」と言い、シラーは「まったく途方もないしろもの」と称していた（＝下線部分）。レンツのひととなりを知っていたゲーテは言うに及ばず、時を経てレンツの原稿を読んだシラーが、その中に「病理学的な価値」を認めるのも十分頷ける。なお、ゲーテは、前記三つのレンツ文献をシラーに郵送した際、『森の隠者』の原稿に手を入れ、過度に彼自身のことをほめかした箇所を削除したと言われている²⁰⁾。

ここでさらに考察しておくべきことがある。

1776年、レンツがヴァイマル公国を追放されたあとは、彼について公に語ることは、ゲーテの手前タブー視されていた。ヘルダーですら、レンツがリーガで父親の助けを得て就職活動をし、司教座教会付属学校の教師として採用されるよう、直接依頼状を書いて援助を求めて来たにもかかわらず、ゲーテを意識して手を差し伸べなかった。そのようなゲーテが、なぜレンツの原稿を長らく所持し、それを印刷発表するシラーの要望に応えたのか。それは、かつてはレンツの作品を何度か出版業者に世話したゲーテの、書かれた原稿はいつかは印刷されるべき運命にある、というような純粋な気持ちによるものであろうか。それとも、仲違いをしたとは言え、ゲーテはまだレンツを完全に否定する心境にまで達していなかったからであろうか。

また、上で引用した、1797年2月2日付の、ゲーテ宛ての手紙の中でシラーは、「著者の死と不幸な生涯がすべての蟠りを消し去り（[...] der Tod und das unglückliche Leben des Verfaßers allen Neid ausgelöscht hat [...]）」と述

べている。筆者は„Neid“（妬み）を取って「蟠り」と訳したが、レンツが比較的早死にし、一生涯定職に就けず、晩年は精神病に冒されたことが一般の同情を得、このことが人々の心から Neid の気持を消し去ったとは言えるものの、レンツと密接な関係にあったゲーテが「妬み」という言葉を使用されて、如何様に受け止めたことであろう。

4

1770年4月18日、ゲーテはストラスブール大学に学籍登録をし、新たな学生生活を開始する。翌年1771年6月に、当市の後見人裁判所書記、J. D. ザルツマン（1722-1812）の主宰する「哲学と文芸の会」（Société de philosophie et de belles lettres）で、遅れてストラスブール入りしたレンツと知り合いになる。もともとレンツは、町を離れて、クライスト男爵兄弟と連隊内で起居をともにしていたために、二人の直接の接触は数えるくらいにしか実現しなかったが、それでも両者の結び付きは熱狂的な友人関係となり、ゲーテが修士号を得て、この年の8月にストラスブールを去ってからでも関係は続き、互いに手紙や原稿を送り合う²¹⁾。

1775年5月から7月にかけてゲーテがスイス旅行（いわゆる第一次スイス旅行）をしたとき、二人の再会が成り、レンツはゲーテの妹コルネーリアが嫁いでいるエメンディングゲンまで同行して、そこに10日近くも滞在するが、ゲーテは別れ際に、レンツのサイン帳に、四詩脚トロカイオス調で三組の対韻を持つ、次のような短い6行詩を献じている。

二人のすてきな詩心の中の
 楽しいひととき、
 すべての喜び、すべての傷、
 すべての不安、すべての苦痛の思い出に —
 なおも最後の瞬間に
 レンツ君にこれを残す²²⁾。

このような親しい関係が壊れるのは、レンツがゲーテのいるヴァイマルに行き、半年間滞在した1776年のことである。その原因は主としてレンツの奇行とゲーテに対する礼を失した言動だとされており²³⁾、結局、先述したように、ゲーテの意を汲んだ領主カール・アウグスト公の命令により、レンツは公国を追い出される。

3年後の1779年、この君公とスイス旅行をした際（第二次スイス旅行）、ゲーテは4月25日、ゼーゼンハイムのフリーオン家を訪ねている。このときかつての恋人フリーデリーケから聞いたレンツの行状について、彼は短いメモ²⁴⁾を残している。内容を箇条書きにすると、以下の通りである。

1. ゲーテがストラスブールを去ったあと、レンツがフリーオン家に現れたこと。
2. レンツがフリーデリーケから、ゲーテに関するあらん限りのことを聞き出そうとしたのみならず、彼女宛てのゲーテの手紙を手に入れようとしたこと。
3. 彼女の秘密を探るために、彼女に惚れ込んだふりをしたこと。
4. 彼女に拒まれたので、実に滑稽な自殺の真似をしたこと。
5. レンツが、ゲーテを傷つけ、世論やそれ以外の方法を使って彼を破滅させる意図を持っていたこと。それがためにレンツはゲーテに、当時、彼の笑劇²⁵⁾を出版するように仕向けたこと。

後年、ゲーテは自伝『詩と真実』（1811-22）でレンツのひとつとなり、彼との関係を振り返ることになる。

この作品の中でゲーテは、計4か所でレンツについて語っているが、第3部11章（1812）と14章（1813）での叙述が最も詳しい。先ず前者では、ストラスブールの「哲学と文芸の会」で論じ合った事情を述べ、当時のその会での議論の内容を象徴するものとして、ヘルダーのシェイクスピア論と並ぶレンツの『演劇覚え書』を紹介したあと、レンツの特徴を精細に描写する。

[前略] 小柄ではあるが姿は感じよく、いとも愛らしい頭部をしていて、そのきゃしゃな形と、かわいくて少しのんびりした顔つきとは完全に釣り合っていた。青い目、ブロンドの髪、つまり、私が北方の青年たちのうちで時々会ったことのあるような人物だった。穏やかな、言わば慎重な歩き方、心地のよい、あまり速くない喋り方、そして、遠慮と内気さを併せ持った、若い男性にまことにふさわしい態度をしていた。短めの詩、とくに自分の詩を彼は非常に上手に朗読し、そしてすらすらと字を書いた。彼の気性を言い表すのであれば、私は英語の„whimsical”しか知らない。この語は辞書が示すように、まさに幾つもの風変りな特徴をひと言でピタリと言い当てている。[後略]²⁶⁾

上記 „whimsical” の意味は、「気まぐれな、〈考え・行動が〉風変わりな、ふらついている」である²⁷⁾。レンツに対するネガティブな特徴づけには違いない。

もちろんゲーテは、『詩と真実』でレンツの否定的評価に終始している訳ではない。後者の第14章で、既述の『演劇覚え書』と同様に、戯曲『軍人たち』(1776)を挙げ、続けて、建白書とも言うべき『軍人の結婚について』(成立年不詳、おそらく1776年)を示唆し、さらに戯曲『家庭教師』(1774)、『新メノーツァ』(同)、プラウトゥス喜劇の翻案劇(5作、同)、シェイクスピアの『恋の骨折り損』(1594/95)の翻訳(1774)を列挙している以上、これはレンツへの一定の肯定的評価と考えられようし、自身、「私は彼の才能を本当に高く評価していた」²⁸⁾とも明言している。しかし彼の、レンツについての印象は、やはり常に基本的に、上で見た „whimsical” であり、この受け止め方は、「こういう風にして彼は一生涯、空想の中に身を置いたひょうきん者で、彼の愛も憎しみも架空のものであり、その想像と感情で彼は勝手気ままに行動した」²⁹⁾ や「本物の深み、尽きない創造力の中から彼の才能は生まれ出、その才能の中で、繊細さ、活発さ、明敏さが互いに競い合っていたが、しかしその才能はまことにすばらしかったものの、まったく病んでいた」³⁰⁾ という表現に現われている。上記の引用文(注28))に続く「そして、彼が無定見な彷徨をやめて自己を集中させ、

持って生まれた人間形成の才能を、芸術にふさわしい枠内で活用してもらいたいと、私はいつも主張していた」³¹⁾なる言葉も同じ考えに立脚している。そしてレンツを語る数ページの最後の段落で、ゲーテは、シュトゥルム・ウント・ドラングのかつての盟友の一人、Fr. M. クリンガー（1752-1831）を引き合いに出して、次のような決定的烙印を押す。

レンツはしかしながら通り過ぎる流れ星のように、ほんの一瞬間ドイツ文学の地平線を超えて行き、その人生に何の痕跡も残すことなく忽然と消えてしまった³²⁾。

ゲーテとレンツが最初にストラスブールで出会ってからすでに42年後の思い出であり、しかも片方は亡くなって20年以上も経っていて、語る口を持たない状況での一方的な人物評である。確かにレンツがリーガに帰った1779年以降は、彼はドイツ文学界から見れば、もはや消滅した存在であった。が、実際はそれからなお13年間スラブ世界で生き続けたのである。現代の我々には、上記引用文の後半部分は必ずしも中まっているようには見えない。また人の記憶は、長い年月が過ぎて行くうちに、たとえ事実誤認がなくとも、次第に風化もすれば、逆にますます濃縮され結晶化するものであることにも注意を要するだろう。しかし、『詩と真実』でゲーテがレンツについて語ったことは、その後のドイツ文学史の中で長い間絶対視され、それに伴ってレンツに対するイメージも固定化することになる。

注

- 1) Rosanow, M. N.: *Jakob M. R. Lenz, der Dichter der Sturm- und Drangperiode. Sein Leben und seine Werke. Vom Verfasser autorisierte und durchgesehene Übersetzung von C. von Gütschow.* Leipzig: Verlagsbuchhandlung Schulze & Co. 1909. S.513.
- 2) Müller, Peter (Hg.): *Jakob Michael Reinhold Lenz im Urteil dreier Jahrhunderte. Teil I.* Bern u.a.: Peter Lang. 1995. S.335f.
- 3) aa.O., S.336.

- 4) a.a.O., S.337.
- 5) Meusel, Johann Georg: *Lexikon der vom Jahr 1750 bis 1800 verstorbenen teutschen Schriftsteller VIII*. Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuchhandlung. 1967. Reprographischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1808. S.140f.
- 6) *Gesammelte Schriften, von J. M. R. Lenz*, Herausgegeben von Ludwig Tieck. Erster Band. Berlin, 1828. Gedruckt und verlegt bei G. Reimer. S.CXX.
- 7) *C. F. D. Schubart's, des Patrioten, gesammelte Schriften und Schicksale*. Stuttgart: J. Scheible's Buchhandlung. 1839. Sechster Band, S.83.
- 8) レンツが愛読した H. フィールディング (1707-54) の長編小説『トム・ジョウズ』(1749)でも、高貴な血筋から生まれた私生児でお人好しの主人公に、陰謀・奸策に長けた弟(義弟)が対置されている。ちなみに、聖書に見られる兄弟争いでは、創世記に、弟アベルを妬んで殺した兄カインの話があり(4章)、また、ルカによる福音書の放蕩息子は弟である(15章11~32節)。
- 9) C. ホーホフは、シラーが『群盗』の序文でレンツの『演劇覚え書』に言及している、と明言している。C. Hohoff: *Jakob Michael Reinhold Lenz*. Hamburg: Rowohlt. S. 92.
- 10) 拙論「J. M. R. レンツのリアリズムと喜劇の精神について — 彼の『放蕩息子』を手掛かりに —」関西大学独逸文学会『独逸文学』35号, 1991年, 77ページ参照。
- 11) *Schillers Werke. Nationalausgabe. Dritter Band. Die Räuber* (以下 NA) . Weimar: Hermann Böhlaus Nachfolger. 1953. S.5 („Menschenmaler“), S.6 („Gemälde“) ; Friedrich Schiller: *Die Räuber. dtv-Gesamtausgabe*. Band 3. München: Deutscher Taschenbuch Verlag. 1972. S.12 („Gemälde“) .
- 12) Jakob Michael Reinhold Lenz: *Werke und Briefe in drei Bänden*. Herausgegeben von Sigrid Damm. Leipzig: Insel-Verlag Anton Kippenberg. 1987. Band 1. S.340.
- 13) Kühnemann, Eugen: *Schiller*. München: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung. 1914. S.67f.
- 14) NA, 28. Band, S.214f.
- 15) NA, 36. Band, Teil I, S.210.
- 16) NA, 29. Band, S.35.
- 17) NA, 36. Band, Teil I, S.433.
- 18) NA, 29. Band, S.43.
- 19) NA, a.a.O., S. 348.
- 20) NA, ebd.
- 21) 1773年, レンツはゲーテに、「我々の結婚について」(Über unsere Ehe)なる、下書き用紙に余白にまでいっぱい書き込みされた「広大な作文」を送る。もともとこの文書は、すでにゲーテの存命中に消失している。s. *Goethes Werke. Hamburger Ausgabe* (以下 HA). Band X. *Autobiographische Schriften. Zweiter Band. Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit*. Hamburg: Christian Wegner Verlag. 1966. S.10.

- 22) *HA*, Band I, S.92.
- 23) 1776年11月26日のゲーテの日記には、ただ一言「レンツの愚行」(Lenzens Eseeley)とだけある。s. *Goethes Werke*. Herausgegeben im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. Weimar: Hermann Böhlau. 1887. III.Abteilung. 1.Band. S.28.
- 24) *HA*, Band X, S.537.
- 25) すなわち、若い疾風怒濤詩人たちが目の敵のようにしていた啓蒙主義作家、Chr. M. ヴィーラント（1733-1813）を揶揄した「*Götter, Helden und Wieland. Eine Farce*」（1774）のこと。
- 26) *HA*, Band IX, S.495.
- 27) 『小学館ランダムハウス英和大辞典』（2002年、第2版第5刷）による。
- 28) *HA*, Band X, S.10.
- 29) a.a.O., S.8.
- 30) ebd.
- 31) *HA*, Band, S.10.
- 32) a.a.O., S.12.

参考文献

- Damm, Sigrid: *Vögel, die verkünden Land. Das Leben des Jakob Michael Reinhold Lenz*. Frankfurt am Main: Insel Verlag, 1989.
- Gajek, Bernhart/Götting, Franz: *Goethes Leben und Werk in Daten und Bildern*. Frankfurt am Main: Insel-Verlag, 1966.
- Zeller, Bernhart: *Schillers Leben und Werk in Daten und Bildern*. Frankfurt am Main: Insel-Verlag, 1966.
- Wilpert, Gero von: *Deutsches Dichterlexikon. Biographisch-bibliographisches Handwörterbuch zur deutschen Literaturgeschichte*. Dritte, erweiterte Auflage. Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, 1988.
- Wilpert, Gero von/Gühring, Adolf: *Erstausgaben deutscher Dichtung. Eine Biographie zur deutschen Literatur 1600-1990*. 2., vollständig überarbeitete Auflage. Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, 1992.

（本研究は、平成18年度関西大学研修員研修費によって行なった。）